

資本主義経済システムの垂直的契機と安定性条件*

——キアスムと価値ヒエラルキー——

坂口 明義**

<要約>

垂直的契機を明示的に考慮に入れて市場システムの安定性条件を定式化することが、オルタナティブ・アプローチとしての全体論的アプローチには求められる。本稿では、キアスムと価値ヒエラルキーという2つの概念に焦点を当て、全体論的アプローチにとってのその含意が引き出される。1では、全体論的アプローチの要件が示される。2では、「関係の経済学」を展開する起点をなす概念として、交換のキアスム構造が直接交換と貨幣的交換の両者について定式化されるとともに、コンヴァンション理論とのその関係づけ、市場システムの垂直的契機の指摘が試みられる。3では、資本主義的生産関係に視野を広げ、そこでの「貨幣の権力」の所在とその安定性条件としての権威（上位価値）とはどのようなものであるかを問題にする。そして、この問いを解明する上で、レギュレーション理論（フォーダイズム分析、貨幣信頼論）が有用な手がかりを与えることが明らかにされる。最後にまとめがなされる。

JEL 区分：A11, B41, E42

キーワード：コンヴァンション理論，レギュレーション理論，貨幣経済学

*本稿の基になったのは、経済理論学会第61回大会（2013年10月18日，於専修大学）にて行った同タイトルの報告である。当日コメントを寄せて下さった方々には，この場を借りて感謝の意を表したい。本稿は，平成25年度専修大学研究助成・個別研究「研究課題：市場システムの安定性条件に関する研究——非新古典派アプローチのパラダイム明確化に向けて——」の研究成果の一部である。

**専修大学経済学部教授

はじめに

本稿は、全体論的な経済理論の要件を明確化しようとするパラダイム論的な考察である。社会関係の前提となる共通観念には垂直的契機（全体性の契機）と水平的契機（相互性の契機）の2側面があるが、このうち垂直的契機を明示的に考慮に入れて市場システムの安定性条件を定式化することが、オルタナティブ・アプローチとしての全体論的アプローチには求められる。この観点から本稿ではキアスムと価値ヒエラルキーという2つの概念に焦点を当て、含意を引き出していくことにする。

第1節では、われわれが全体論的アプローチと呼ぶものの概略を述べる。第2節では、商品関係のレベルで考察を行い、交換のキアスム構造を、直接交換、貨幣的交換の順に考察する。第3節では、資本主義的生産関係を視野を広げ、市場システムの垂直的契機と価値ヒエラルキーについて考察を行う。最後にまとめを行う。

1. 全体論的アプローチについて

通常われわれが「経済理論」と呼ぶものは、市場経済の理論である。そして経済学が社会科学の一分野であるとするれば、経済理論は市場社会の分析でなければならない。その際、市場における社会関係のとらえ方をめぐって、大きく2つの立場が分かれる。一方には、個人間の諸々

の相互作用が事後的に調和性を達成したときに、個人間関係の集合を「社会」と見なす立場がある（事後的社会概念ないし社会名目論）。他方には、個人が市場取引に入る前に、既に社会的相互作用の影響に服しているとする立場がある（事前的社会概念ないし社会実在論）。前者はいわゆる主流派である新古典派アプローチの立場であるが、それにとどまらず、反主流派を自任するマルクス派等もこの立場を採る傾向がある。これらを否定して後者の立場をとろうというのが、本稿でいう全体論的 (holist) アプローチである。いまだ仮説の域を出ないが、今後の日本の経済学において新たなパラダイム対立が出現するとすれば、全体論的／非全体論的という線引きは主要な対立軸となりうるのではないだろうか。

本稿で「全体論的アプローチ」というとき、二つの要件を満たすアプローチを考えている。第一の要件は、全体論的な事実を考慮に入れることである。全体論的な事実とは、市場において個人同士が互いに関係を取り結ぶ以前に、既に「社会」が諸媒介 (médiations) の形で存在していることを指す。そのような媒介には言語・貨幣・法¹⁾があり、いずれも一定の権威とともに諸個人に受け入れられ、それらの使用または遵守は規範として諸個人に課される。これらは広い意味での「制度」である²⁾が、いわゆる制度諸形態に対しては「社会諸関係の形式ないし構造」と呼ばれるものである³⁾。またこれらが「全体論」的な事実であると言われる場合、

1) これら媒介の性質を究明することの重要性の指摘、または究明しようとする試みとして、例えば岩井 [1997]、Luhmann [1988] 参照。岩井 [1998] は、貨幣という媒介の性質を究明することに捧げられている。そこでは、最近のオルレアン (Orléan [2011]) と同じく実体論批判が論点になっている。すなわち、「……一見対立している貨幣商品説も貨幣法制説も、ともに貨幣というものの現実的な存在にたいしてなんらかの実体的な根拠をもとめていることにおいては同罪」(岩井 [1998] p.103) だとされる。しかし、貨幣の存在を模倣仮説で説明するオルレアンとは異

なり、岩井氏は貨幣の存在を「無根拠な出来事」としてしまい、その説明を放棄している。すなわち、貨幣が「ある」と「ない」の間には乗り越えがたい断絶があるとした上で、「その断絶が現実において乗り越えられるとしたら、それは『歴史の偶然』、いや『歴史の事実性』としかいいようのない無根拠な出来事であり、まさに一つの『奇跡』にほかならない」(岩井 [1998] p.105)、というのである。

2) オルレアンにおいては貨幣が制度であるということにとどまらず、価値もまた制度としてとらえられる (Orléan [2011] 第II部参照)。

これらが原子的個人間の契約関係には還元されないことを含意している。第二に、経済理論の全体論的アプローチは、単に全体論的な事実の存在を指摘するだけでなく、市場システムの安定的機能条件（安定性条件）を上記の諸媒介と関係づけながら定式化していかなければならない。「市場システムの安定性」ないし「市場秩序」は、上記の諸媒介が安定的に機能することによって確保される。よって諸媒介がどのような条件の下で安定的に機能するかを定式化することが求められる。新自由主義批判の文脈の中では、市場システムの不安定性こそが解明されるべきだということが一方的に強調されがちである⁴⁾が、これに関連しては二点指摘しておきたい。①市場システムが安定と不安定の局面交替により性格づけられることは、今日においても依然として変わらない。②市場システムの不安定性をめぐる議論は何らかの安定性公準を前提しており、不安定の解明には安定性の定義・条件の明確化が不可欠である。

以上のように、「全体論的アプローチ」では、「市場システムの安定性」ないし「市場秩序」についての記述が追求される。本稿では、そのための基礎研究として、そうした「安定性」「秩序」を定義することを試みたい。

2. 交換のキアスムについて

(1) キアスム論

まず「キアスム」という用語について説明しておきたい。

メルロ＝ポンティは、個人間の感覚的相互作用（見る、触れる等）の構造をキアスム (chiasm; 「交差」「交差構造」「絡み合い」などと訳される) という用語を用いて性格づけた（メルロ＝ポンティ [1999] p.116-165）。「主体と客体の関係、主体と他なる主体の関係について、これまでにない言葉で語ろうとする」キアスムの考え方においては、「主体と客体の関係は、サルトルの場合のように弁証法的に対立しあうのではなく、互いにその可能性の条件を提供しあう相補的で可逆的な関係を構成しているのである」（中山 [1999] p.297）。キアスムは、主体／客体間、二主体間の媒介的に対称的な相互依存関係を意味する用語である（注7も参照）。

最近では中沢新一氏が、東日本大震災（2011年3月11日）後の日本社会の課題を指摘するためにこの概念を盛んに用いている。「……さまざまな領域にキアスム的な関係を再構築していくという課題が、浮上しはじめています。失われた社会的な絆を取り戻そうとすると、人間同士の間で共感が生まれるベースであるキアスム的な関係の再生は、なくてはならない条件です」

3) R. ボワイエは、レギュレーション・アプローチはマルクスの「全体論的方法」（Boyer [1986] 邦訳 p.36）の系譜を引いているとして、この方法の内容を「社会諸関係（商品関係および／あるいは賃労働関係）の総体が経済的規則性に対してどういう影響を与えるか、という問題以外のなにもでもない」（同前）としている。またその際、レギュレーション理論との関係では、全体論的方法は「制度諸形態」の「構造論的・全体論的定義」（同前 p.37-38）を与えるものとされている（「社会諸関係から制度諸形態へ」）。

4) ベルリン学派のヘルは、ポストケインズ派が市場システムの本来的不安定性を主張することで異端の地位にとどまらざるをえなかったことを念頭におい

て、均衡分析の必要性を次のように述べている。「均衡分析の必要性を強調することは、経済システムが均衡に向かう傾向にあるということを含意しない。むしろ全く逆に、均衡を方法的道具として用いながら同時に貨幣経済の内生的不安定性を導出することも全く可能なのである」（Herr [1992] 邦訳 p.68）。ベルリン学派の「貨幣重視ケインズ主義（Monetar-Keynesianismus）」は、主流派である新古典派経済学の（市場システムの安定性条件としての）一般均衡公準に代わる「対案」の提出を重視することにより、経済学研究のあるべき方向性を提起した。この点は坂口 [2001] 第7-9章参照。

(中沢 [2012] p.233)。中沢氏はキアスムを特に贈与交換（モース）に結びつける：「キアスムの関係にある個人や集団の間で、なにかの交換がおこなわれるときにも、交換されるモノと所有者との縁まで、モノといっしょに相手に手渡されていくから、そこにはかならず価値計算のできない『 $+α$ 』の要素が組み込まれる。そのとき交換は贈与の性格をおびるようになる」（中沢 [2011] p.47-48）。ところが中沢氏によれば、等価交換（ないし「貨幣による等価交換」）においては、キアスムは働かないとされる。すなわち、「ところが、市場はそれとはまったく異なる原理で動くシステムなのである。市場へ持ち込まれた商品は、いったんすべての『縁』を断ち切られて、いわば『無縁』となった品々である。その商品を売り手と買い手は、クールな態度で交換する。ここでは市場の外の、あの『社会』というところで作動しているキアスムの構造は、その動きを停止させられている。そうすると商品となった品物は、交換されるのを待つただのモノとなる」（中沢 [2011] p.51）。

共感のベースをキアスム構造に求め、キアスムには「 $+α$ 」の要素があるとする中沢氏の見解はキアスムの意義をよくとらえている。しかし、中沢氏がキアスムを贈与交換（本稿では「直接交換」）にのみ見だし、等価交換（本稿では「貨幣的交換」）には見いださない点は首肯しうるものではない。中沢氏の主張は、市場には共感の要素がないとする一般的な実感に対応するものであろうが、だからと言って市場には

キアスムが見られないということにはならないだろう。キアスムが社会諸関係⁵⁾の形式ないし構造に見られる一般的特徴であるとすれば、それが市場の交換（貨幣的交換）には見られないとすると、市場社会の存立を——ひいては経済学理論の存在意義を——否定する議論になるのではないかと思われる。

本稿の以下では、直接交換と貨幣的交換の構造をより正確に規定することによって、両者にキアスムを見いだしていく。今述べたように、この論点が重要であるのは、市場にキアスムが見られないということになると、市場システムの安定性や市場秩序について語ることが重要性を持たなくなるからである。以下では、交換（直接交換と貨幣的交換）にキアスム構造を見いだした上で、同じキアスム構造を持ちながら直接交換と貨幣的交換が互いにどのような差異を持つのかを考察していきたい。

（2）直接交換のキアスム構造

以下では、ゲーラー（Göhler [1980]）によりながら、交換のキアスム構造を考察していく。ゲーラーは、マルクスにおける「弁証法の縮減⁶⁾」という自らのテーゼ⁷⁾を裏づけるために『経済学批判』（Marx [1953]）と『資本論』（Marx [1962]）における貨幣生成論の比較研究を、構造論的解釈という手法を用いて行った。この中で直接交換（物々交換）の構造が「キアスム（Chiasmus）」（Göhler [1980] S.61）として性格づけられている。キアスムとしての直接交換の構

方向の議論であると思われる）。

6) Reichelt [1985] がドイツの『資本論』研究の成果としてゲーラー説を高く評価して以降は、管見する限りで、長い間、ゲーラーの研究が本格的に議論されることはなかったものと思われる。近年はドイツの『資本論』ブームの中でゲーラー説を扱った論文が出てくるようになった（Hoff *et al.* [2006]）。これについての紹介は他日を期すこととする。

7) ゲーラーの「弁証法の縮減」テーゼについては坂口 [1989] 参照。

5) ここで「社会諸関係」とは、あるがままの諸個人間の相互作用を意味している。つまり問題にしているのは、歴史的使命を背負った実践（*praxis*）ではなく実際行為（*pratiques*）である（実践と実際行為については山本 [1992] 参照）。よって、経済原則を特殊商品経済的な仕方を実現する価値法則（宇野 [1964] p.4-5）を扱うことはここでの問題ではない。「あるがまま」ということでは、例えばマルクスの指摘した商品や貨幣の物神崇拜についても、その諸契機を分析して市場取引主体の行動の理解につなげることが重要と思われる（佐藤 [1982] はこのような

造の提示は『経済学批判』と『資本論』の両方に見られるが、この構造が貨幣生成論の原初構造 (Ausgangsstruktur) として体系的に重要な位置づけを持つ『経済学批判』の叙述を挙げておこう (『経済学批判』における貨幣生成論は交換過程の文脈の中に価値形態の展開が置かれ、『資本論』のような価値形態論と交換過程論の明確な分離が見られない) :

「商品は、使用価値、小麦、リンネル、ダイヤモンド、機械等々であるが、しかし商品としては、同時にまた使用価値でない。もしそれがその所有者にとって使用価値であるならば、すなわち直接に彼自身の欲望を満足させるための手段であるならば、それは商品ではないだろう。彼にとっては、それはむしろ非使用価値であり、すなわち、交換価値の単なる素材的な担い手、または単なる交換手段である。交換価値の能動的な担い手として、使用価値は交換手段となる。その所有者にとっては、商品は交換価値としてだけ使用価値なのである。だから、使用価値としては、それはこれから生成しなければならないのである。しかもまずもって他の人々にとっての使用価値としてである。……他方では、商品は所有者自身にとっての使用価値にならなければならない。なぜならば、彼の生活手段は、この商品以外に、他人の諸商品の使用価値として存在しているからである。使用価値として生成するためには、商品は自分が充足の対象であるような特殊の欲望に出会わなければならない。だから諸商品の使用価値は、商品が全面的に位置を転換し、それが交換手段である人の手から、それを使用対象とする人の手に移ることによって、使用価値として生成するのである」(Marx [1953] 邦訳 p. 44-45; 下線引用者)。

ゲーラーは、以上の記述が直接交換の条件を定式化したものであり、ここではこの条件が構

図 1

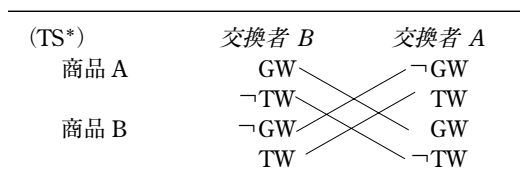
(TS)	交換者 B	交換者 A
	GW _A	¬GW _A
	¬TW _A	TW _A
	¬GW _B	GW _B
	TW _B	¬TW _B

造として記述されていると解釈する。しかし文章表現ではこの構造——交換構造 (Tauschstruktur; TS) ——を理解することが困難であることから、ゲーラーはこの構造を一目瞭然にするよう記号を用いた図式化を行った (詳しい紹介は坂口 [1993] 参照)。

まず記号について説明しておこう。商品 A と商品 B の間の交換を想定し、対応する所持者が交換者 A と交換者 B であるとする。GW を使用価値 (Gebrauchswert), TW を交換価値 (Tauschwert) とし、下付き添え字 A と B でそれぞれ商品 A と B の規定であることを示すこととする。¬ は否定を表す (例えば「¬GW」は「非使用価値」)。これらの記号を用いて、交換構造 (TS) は図 1 のように表される。右列は交換者 A にとって、左列は交換者 B にとって、商品 A, B がどのような規定において現われるかを示す。商品 A, B の諸規定が左右に割り振られることが、交換の条件である。注意すべきは、ここでは交換価値は、個人にとっての交換手段という意味を持つにすぎないことである (なお、『経済学批判』においてマルクスは「価値」と「交換価値」を十分に区別して使用していない)。

(TS) の含意として二点指摘しておきたい。第一に、この構造のキアスムとしての性質について確認したい。二個人の間でこの布置が成り立つとき、交換が成立する。直接交換の構造というと、「欲望の二重の一致」という規定で済まされることが多いが、ここでの表現は直接交換についてのもっと詳細な記述である。図 1 に見られるように、この構造は、商品の諸要因の左右の列への振り分けによって成り立っている。

図 2



どれか一つでも同じ規定が左右の両方に出現するならば、この構造は成り立たない。つまり (TS) は、交換成立の条件が容易には満たされないことを示唆している。ただし逆に言えば、(TS) で示される条件さえ満たされれば交換は可能なのであり、このことは、貨幣的交換が支配的な社会においても直接交換が不可能なわけではないことを示すものである。(TS) は、社会関係の 1 基本形式としての直接交換を記述している。(TS) の構造性格を明らかにするために、図 1 の諸規定から添え字を取り去り、同じ規定を線で結んでみる。これが図 2 に見られる交換の媒介構造 (Vermittlungsstruktur) (TS*) である。「商品所持者にとっての 2 商品の規定は交差的に同一である」(Göhler [1980] S. 61)。これがキアスム⁸⁾であることは明白である。2 商品の諸規定の布置は 2 交換者の間で対称的であり、布置構造の効果 (交換実現の条件) によって相互依存を可能にしている。最後に強調しておきたいのは、直接交換のキアスムは、商品

8) ゲーラー自身によるキアスムの説明は次の通り。「修辭学において、キアスムは——ギリシャ文字 χ (カイ) の形にならって——、相関する単語や成分の交差的な統語論的配置を意味する。個々の要素の十字交差的な関係は、『弁証法的叙述形態』とも呼ぶことができる；何よりもまずヘーゲルは対立 [Gegensätze；両極] の媒介においてこの構造を展開した。それゆえここでも『キアスム』という用語を使用してよい；私は『キアスム』という用語によって、各極がそれ自身でもありその反対物でもあることによって二つの極が統一を形成する (媒介される) 構造を言い表すことにする。これによって、各極の諸要素は対立極の諸要素に交差的に関連づけられる」(Göhler [1980] S. 60)。

を要因分解して考察すること (マルクスの言う「商品の分析」) によって初めて記述される構造性格だということである。

第二に、直接交換に見いだされる垂直的契機について確認しておきたい。(TS) の構造性格である対称性は、2 交換者の関係が水平的であることを意味している。ただしこれは、直接交換が一回完結的な私的関係として行われる限りにおいてのことである (たまたま生産余剰が発生したケースなど)。交換を目的に商品を手し繰り返し交換を行おうとする場合、交換に有利な使用価値や、受け入れられ易い交換比率についての情報を集めることが必要となる。情報内容が慣行 (convention) によって与えられる場合、慣行に従うことが規範として課されるならば、全体論的な構図 (両交換者は最初から慣行を共有しており、その上で交換行為に入る) が表れる⁹⁾。ただし貨幣的交換と違い、交換者間の関係が垂直的な権力 (pouvoir) 関係となるわけではない。慣行に影響を与える権威の面で国家などの上位審級が影響を与える可能性はあるが、交換の形式そのものは水平的である (勢力 (puissance) 争いは存在するだろう)。

(3) 貨幣的交換のキアスム構造

貨幣的交換 (商品と貨幣との交換) の交差構造もまた、『経済学批判』(Marx [1953]) と『資

9) 貨幣の原型を全体性と相対関係の観念に求める吉沢氏は、物々交換 (直接交換) には全体性の契機が不在であることから社会制度としての物々交換の実在性を否定し、市場交換の起源を贈与交換に求める。「……しばしば現代における売買の出発点とされ、また経済の始源の形態ともみなされる物々交換は、実際には存在せず、出発点となり始源となるのは贈りものの提供・受容・返礼の制度である」(吉沢 [1994] p. 95)。本稿でも、せいぜい物々交換が狭い範囲で一定の社会的広がりを持つことを想定しているにすぎない。ただし、こうした水準においても慣行という全体性の契機を考えることができるというのが、本稿の観点である。

図 3

(ZS)	商品	金
	reell GW	ideell GW
	ideell TW	reell TW

本論』(Marx [1962]) の両方に類似の定式化が見られる。そのうち『経済学批判』第 2 章 2 「流通手段」における定式化を引用しよう：

「だから使用価値と交換価値との対立は、W-G の両極に対極的に配分されていて、そのため、商品は金に対立して使用価値であり、その観念的な交換価値である価格を金ではじめて実現しなければならない使用価値であり、他方、金は商品に対立して交換価値であり、その形態的使用価値を商品ではじめて物質化する交換価値なのである。ただ商品と金とへの商品のこの二重化によって、しかもどちらの極も、その対極が実在的であるものは観念的であり、その対極が観念的であるものは実在的であるという、やはり二重の対立した関係によって はじめて、したがってただ商品を二面的に対極的な対立として表示することによって はじめて、諸商品の交換過程に含まれている諸矛盾は解決されるのである」(Marx [1953] 邦訳 p.113-114；下線引用者)。

上の引用で提示されている貨幣的交換の構造 (ZS; Zirkulationsstruktur) は、ゲーラーによって図 3 のように定式化されている (Göhler [1980] S.60)。商品世界の中から金が貨幣に選出 = 排除された結果は、諸商品と貨幣との間での役割の固定化である。すなわち、商品のいわゆる外的二重化により、金の現物が諸商品の交換価値を、諸商品の現物が自身の使用価値を表すようになる。金は一般的交換手段という形態的使用価値を持つものとして、諸商品は本来的な使用価値を持つものとして欲望対象になる。異種の使用価値の交換であるという点では、貨幣的交換も直接交換も同じである。しかし金が

図 4 : (ZS*)

商品		金		商品		金	
GW	reell	ideell	reell	reell	GW	TW	TW
TW	ideell	reell	ideell	ideell	TW	GW	GW

「現実的な交換価値」であることは、特定の交換者が私的に与えた規定——(TS) の TW のように——ではない。貨幣的交換は、商品の価格表示とその実現という過程をたどる。金は、消費を目的としてではなく、流通において永続的に「現実的な交換価値」であり続けるものとして欲せられる。以上のことから、図 3 のように、商品と金における「使用価値」と「交換価値」、「観念的 (ideell)」と「実在的 (reell)」の 2 組の諸規定の布置が得られる。この全体構造が流通構造 (ZS) である。

(ZS) の含意として 2 点指摘しておきたい。

第一に、この構造のキアスムとしての性質についてである。ゲーラーは、2 組の諸規定のどちらに着目するかによって、2 通りのキアスム構造 (ZS*) が得られるとする (図 4)。諸規定の布置は金と商品との間で対称的であり、布置構造全体の効果 (交換実現の条件) が相互依存を可能にする。市場における商品と貨幣の関係は、非対称的な権力関係と見なされることが普通であり、それは正しい (後述)。しかし商品所持者と貨幣所持者との間で自由な交換取引が行われるのは、両者が交換の効果を享受する限りにおいてである。交換という相互媒介の構造は、要素的な諸規定の配置によって形づくられる全体的な媒介構造 (ZS*) としてのみ記述される。一般的に、権力関係は非対称的であるとしても、(権力行使の結果として) 取引主体間に形成される相互依存関係はキアスム (諸規定の布置における交差的な対称性) として記述されると言えよう。

第二に、貨幣的交換の水平性と垂直性についてである。直接交換と違い貨幣的交換は、反復を当然の前提とする交換形式である。(ZS) の構成要素を見ると、商品の「現実的な使用価値」

と貨幣の「観念的な使用価値」という2つの規定には、(TS)と同じように、使用価値の社会的な定義¹⁰⁾という全体論的な契機が対応している。また金の「現実的な交換価値」と商品の「観念的な交換価値」という2つの規定には、貨幣金の社会的通用および妥当な価格についての社会的通念といった慣行 (convention) が全体論的な契機として対応している¹¹⁾。こうした全体論的な契機が取引諸主体の上位に位置し規範として課されるので、貨幣的交換には垂直的な側面があると言える。しかし他方で、金が「観念的な使用価値」であるという規定においては、金貨幣の所持者が目録 (ノマンクラチュール) の中から獲得商品を裁量的に選択する権利を有しており、この点において貨幣所有者は (ZS) の成立にあたって主導権を持つ。これが「貨幣の権力」(後述)による非対称性である。ゆえに、(ZS)はキアスム構造である点で (TS) と共通であるとともに、貨幣の権力による非対称性をともなう点で (TS) と区別される。

まとめておこう。中沢氏は市場とキアスムを結びつけることには否定的である (前述) ようだが、本節で提示したように貨幣的交換にはキアスムが見いだされる。マルクスの商品分析の枠組みにおいて提示される貨幣的交換のキアスムは、単なる物の移動の交差 ($W \Leftrightarrow W$ あるいは $W \Leftrightarrow G$) を意味するのではなく、物 (商品、金) の諸規定の交差的布置 (したがって関係) を意味している。経済学において「市場システムの安定性」「市場秩序」に関心が持たれるのは、市場におけるこうした相互依存関係が、社会関係の一基本形式であるからではないのか。

10) これに対応する経済学上の仮説を言い表したものが、ベネッティ=カルトゥリエの指摘した財の「目録 (ノマンクラチュール)」である (海老塚 [1984], Orlean [2011] 第2章参照)。

11) 使用価値の規定は他者準拠的であるのに対して、交換価値の規定は自己準拠的である。ルーマンが貨幣的交換をオートポイエティック・システムと性格づけるとき、この特徴が重視される。「閉じたシステ

3. 貨幣・資本と価値ヒエラルキー

(1) 価値ヒエラルキーについて

前節で、(ZS)が貨幣の権力を前提していることを指摘した。(ZS)においては、貨幣所有者——商品所有者ではなく——のみが、商品所有者に商品を譲渡させることができる。この意味の「貨幣の権力」は通常、一般的な直接的交換可能性とか購買力と呼ばれる。貨幣所有者は市場システムの分権的意思決定の担い手として「貨幣の権力」を行使するのであり、その結果は、(ZS)で表される相互依存関係の実現である。「貨幣の権力」という観点から見れば、貨幣的交換は権力保有者と権力非保有者の関係、つまり権力ヒエラルキーに基づく垂直的な関係である。

ここでわれわれは、権力と権威 (正統性) の関係を考慮することにする。権力が個人間関係において安定的に行使されるのは、社会的権威の裏づけがある場合である。権力の行使が社会的権威を持つには、権力行為の内容が社会の上位価値に合致していなければならない。交換当事者が「貨幣の権力」を行使するに際して直接に価値が置かれるのは、貨幣の購買力や商品の使用価値である。これは下位価値である。これに対して、貨幣的交換に際して当事者が遵守すべき取引ルール¹²⁾を正統化するものが上位価値である。「貨幣の権力」の行使者は権力面で上位に立つ半面、取引ルールを遵守する義務を負う。アグリエッタとカルトゥリエ (Aglietta/Cartelier [1998]) は、貨幣的秩序の安定がこうし

ムは開いたシステムとしてのみ可能であり、自己準拠は他者準拠と組み合わせられた形でのみ現われる」(Luhmann [1988] 邦訳 p. 3)。

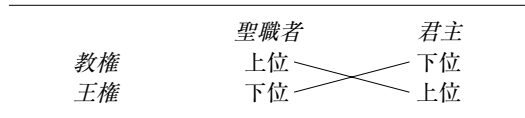
12) アグリエッタとカルトゥリエは「支払システムの基本ルール」として「共通の計算単位」「貨幣造出の原理」「残高決済の原理」を挙げている (Aglietta/Cartelier [1998] 邦訳 p. 207-214)。坂口 [2011] p. 10 も参照。

た価値ヒエラルキーによって支えられているとした(坂口 [2011] p.13の図1参照)。

貨幣に関わる価値ヒエラルキーに着目するこのような議論は、デュモン (Dumont [1980] [1983]) の影響を受けている。デュモンは、社会秩序の安定にとっての価値ヒエラルキーの重要性を明らかにした。デュモンの議論の特徴を押さえるために、ここでは2つの論点のみ簡単に見ておきたい。第一に、一般的にある次元のヒエラルキーが別の次元のヒエラルキーによって相殺されることについて、デュモンは次のように説明している。「……ひとつの次元を他の次元に従属させるヒエラルキーの原理は、同時に次元の複数性ということを導入することで状況の逆転の可能性を生み出す……。 (たとえばインドにおける) 一家の母はいくつかの点では、女性であるということからたいへん劣等な地位に置かれているからといって、家族の内部の諸関係においては支配的な地位をもっていないわけではない。平等主義的な視点から見れば、こうした逆転こそが伝統的社会を生きることのできるものにしていてもいえる。〔両性の不平等に反応する〕平等主義的メンタリティは、ひとつの次元にしか注意を向けられないことで、こうしたことを見失ってしまうのである」(Dumont [1980] 邦訳 p.411)。「ヒエラルキーがあるのになぜ社会は凝集性を持つのか」という問いから社会科学の分析は始まるわけであり、この引用文はそうした問いへの解答として読むことができる。第二に、権力と権威の(価値)「ヒエラルキー的補完関係」(Dumont [1983] 邦訳 p.75; 傍点引用者)についてデュモンは様々な例を挙げている。ここではそのうち2つを見ておきたい：

①紀元5世紀の法王ゲラシウスが描いた王と聖職者の関係(図5)についてデュモン

図5 王と聖職者のヒエラルキー的補完関係



は次のように解説している。「宗教の領域、言い換えれば絶対的な意味では、聖職者は公の秩序を任された王もしくは皇帝の上位にあります。ところが同時に、公の秩序つまり、従属的な領域においては聖職者は王に従うのです」(同前 p.363)。

②同じ関係は古代インドのヴェーダ社会に見られるとされる；「インドでは聖職者は宗教的に国王に対して絶対的な優位を保っていたのだが、現実問題については国王に従属していた」(同前 p.75)。

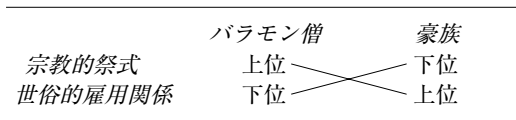
①と②のどちらの構造もキアスムによって特色づけられることに注意してほしい。デュモンはこれを「交差」と呼び、これを「明示的なヒエラルキー¹³⁾に特徴的なもの」(同前 p.363)としている。

デュモンから大きな影響を受けているアグリエッタ／オルレアン編著『貨幣主権論』(Aglietta /Orléan [1998])においては、貨幣に関わる価値ヒエラルキーの例がいくつも挙げられ、比較分析が試みられている。ここでは第1章に所収のマラムー論文を紹介しておきたい。デュモンの弟子マラムーは、インド・ヴェーダ社会におけるソーマ供犠祭を考察する中で、豪族(祭主)が僧(祭官)に支払うタクシナー(報酬)貨幣に近代貨幣の萌芽を見いだすという興味深い指摘を行っている(Malamoud [1998]；坂口 [2011] p.3-7も参照)。祭官＝バラモン僧が被雇用者として世俗的には下位に位置しながらも、供犠の効果に関わる宗教的な理由によって供犠執行を支配する(図6)。このような仕方

13) 明示的でないヒエラルキーとしてデュモンが挙げるのは、旧約聖書中のアダムとイヴの例である。「ヒエラルキー的対立の上位の極が全体であり、下位の

極がこの上位の極との関係によってのみ規定される場合には不明瞭なものとなります」(Dumont [1983] p.363)。

図6 豪族とバラモン僧のヒエラルキー的補完関係



世俗的生活と宗教的生活の全体が安定的な布置構造を獲得するというわけである。

このように、デュモンおよびその影響を受けた諸研究は、人間社会の基本的な構造として権力と権威（価値ヒエラルキー）の関係に強い関心を寄せ、これを分析の対象としている。市場の交換に介在する権力（貨幣の権力）に対応する権威の所在を問うことは、このような一般的な観点から市場システムの安定性を考察することを意味すると言える。もっとも、このような主張に対しては、次のような反対意見が予想される。すなわち、人類社会の課題は権力の平等を実現することであり、そのためには（権力を正当化する）価値をイデオロギーとして批判し放逐することが重要なのである、と。実際デュモンも上位価値を「イデオロギー」と呼んでいる。イデオロギーとは「ある与えられた社会において成立している理念と価値の体系」（Dumont [1983] 邦訳 p. 21）だとされ、その上で、「近代社会に特徴的な理念と価値の体系」である「近代イデオロギー」（同前）とは「個人主義」にはかならないとされる。しかし強調しておきたいのであるが、デュモンの研究目的が、権力の正統性を否定するためにイデオロギーの虚偽性を暴露することにあるのではないことは明らかである。デュモンの議論はむしろ、現在の社会においてであれ将来の社会においてであれ、イデオロギーは社会秩序に不可欠な構成契機であると見なした上で、イデオロギーを構成契機とする社会秩序を実証的に分析しようとするものである。われわれも、このような方向での研究が現実的・生産的であると考える。

（2）資本主義的市場システムと「貨幣の権力」

では、「貨幣の権力」を補完する権威（上位価値）について考察していこう。前述の「貨幣の権力」が現実の問題として現われてくるのは、単なる商品関係を超えて、資本主義的生産関係（生産手段からの労働者の分断）という全体社会的文脈が考慮されるときである。順を追って考えていきたい。

まず市場そのもの（貨幣的交換の繰り返し）について考える。経済システム（市場）をオートポイエティック・システムとしてとらえるルーマンは、経済システムを「支払いによる支払いの再生」（Luhmann [1988] 邦訳 p. 44）と性格づけている。貨幣は物の形をとった全体論的契機であり、取引主体の間で権力として作用する。しかし貨幣が購買手段として転々流通する限りでは、個人間の権力の非対称性は流動的である。この限りでは、個人が貨幣所有者であることを正統化することは問題にならない¹⁴⁾。ルーマンの「支払いによる支払いの再生」は、市場システムのこの次元を性格づけたものと解される。

しかし、資本主義的生産関係を考慮するとき、新たな問題が浮かび上がってくる。マルクスが明らかにしたように、賃労働関係（資本-労働関係）の再生産は、非対称的な権力関係の固定化を意味するからである。

通常「貨幣の権力」と言うと、貨幣所有者（売買契約における買い手、信用契約における債権者）が自己に有利な取引条件を課すことができることを意味する。これは、商品に対する貨幣の相対的稀少性の強さに基づいている。貨幣が単に購買力を持つというだけでなく、慣行・制度を背景として貨幣入手の容易さ——入手可能性（アヴェイラビリティ）——が非対称であることが、「貨幣の権力」成立の必要条件であ

14) この場合に問題となる正統性は、『経済学批判』の想定で言えば）金——他の商品でなく——が貨幣

であることの正統性であろうが、本報告ではこの問題には立ち入らない。

る。このときの関係の垂直性は、購買力の有無という先ほどの垂直性とはレベルを異にしている。資本主義的市場システムにおいては、貨幣の入手可能性の非対称性は、大きく2つの関係を通じて作り出される。

①賃労働関係の再生産／これはマルクスが明らかにした古典的な関係である。賃労働関係の再生産においては、各労働者は受け取った賃金を支出して消費活動を行った後、再び労働者すなわち貨幣非所有者として労働市場に現われる。賃金の額は、労働者が資本家に転化することを許さないように制約されている。これに対して資本家は支出貨幣が手許に還流してくるので、貨幣所有者として労働市場に現われる。この関係を利用して資本家は、労働市場において自らに有利な取引条件（賃金水準、労働条件、賃金支払方法など）を課そうとする。資本家＝貨幣所有者、労働者＝貨幣非所有者という関係は固定化しているため、「貨幣の権力」の行使が安定であるためには、しかるべき正統化が要求される。

②信用貨幣制度／貨幣発行制度には非対称性が見られる。貨幣発行者は自ら貨幣を創出するが、貨幣使用者が貨幣を入手するには代償を払う必要がある。一般に信用貨幣制度の下では、貨幣発行は信用関係を通じて行われ、「貨幣の権力」の非対称性は信用供給者と信用需要者との間に見いだされる。現代の二層の銀行制度の下では、この関係は、中央銀行と商業銀行との間の信用関係と、商業銀行と企業との信用関係とに二重化している。前者の信用関係においては中央銀行＝貨幣発行者、商業銀行＝貨幣使用者という関係が固定化し、後者の信用関係にお

いては商業銀行＝貨幣発行者、企業＝貨幣使用者という関係が固定化している。この二つの関係について、しかるべき正統化が要求される。

以上のように、資本主義的市場システムには、「貨幣の権力」による一連の非対称的な関係（タテの関係）が組み込まれている。これらの関係が長期的に安定化するためには、「貨幣の権力」の行使に権威が付与されなければならない。権力行使の権威は、社会的に承認された上位価値との合致によってもたらされる。よって、市場システムないし市場秩序が安定であるための前提は、社会的に承認される上位価値が歴史の中でうまく発見されることであると言える。

①についての分析は、レギュレーション派のフォーディズム分析に見いだされる。フォーディズム的労使妥協は、「社会進歩¹⁵⁾」という上位価値との合致をもたらしものであった。資本家＝貨幣所有者が行使する「貨幣の権力」は、労働搾取を含蓄する雇用（労働力販売）契約を賃金労働者に受け入れさせるといふものである。この際に「社会進歩」の約束がなければ、「貨幣の権力」は私的利益に資する不正なものとなされ、生産における賃金労働者の協力は得られないであろう¹⁶⁾。その帰結は、「貨幣の権力」すなわち賃労働関係への異議申し立てすなわち社会主義運動の活発化であるだろう。レギュレーション派が先進国の戦後高度経済成長に関する実り多い分析を行いえたのは、「貨幣の権力」を上位価値が補完することによって資本主義的市場システムが安定化を獲得するという現実に実証的分析のメスを入れたことによるものと言えよう。

②については、アグリエッタ／オルレアン編

15) フォーディズム的労使妥協において生産性上昇益が賃金労働者に分配されるようになったことは、賃金労働者が社会的パートナーとして承認され、消費社会に統合されたことを意味した。

16) 1991年にリピエツは、「もっとも、過去にフランスの左翼に見られた問題とほとんど大差はないが」と断った上で、日本の労働組合運動や市民運動に対

して次のような指摘を行っている。「日本の左翼における重要な問題の1つは、いままで彼らが、資本主義の枠内で一定の社会進歩を獲得する可能性について過小評価してきた点にある」(Clerc/Lipietz/Satre-Buisson [1985] 邦訳 p.iv-v)。これは、「貨幣の権力」を実証的に分析する観点が過小評価されてきたこととパラレルではないかと思われる。

著『貨幣主権論』(Aglietta/Orléan [1998])序説で提示されている貨幣信頼論が有用な手がかりを与えてくれる。資本主義的信用制度の下では、貨幣使用者の間で貨幣の入手可能性について非対称性が存在する。なぜなら信用アクセスは、一方で消費者に対して企業が優位であるし、他方で企業の中で特定の企業が優位¹⁷⁾だからである。前者は①と同じように、「社会進歩」という目的によって正統化される性質のものである。これに対して後者は、社会的に承認された「支払システムの基本ルール」(Aglietta/Cartelier [1998])の順守による正統化を要求する(前述参照)。貨幣の信頼は、「基本ルール」が順守される(通用する)であろうことへの信頼として説明される。では、貨幣の信頼を維持するために中央銀行がとる集権的行動はどのような安定性条件を持つだろうか。貨幣の信頼は方法的信頼・ヒエラルキーの信頼・倫理的信頼の3側面から成る(坂口 [2001] p. 64-68参照)。民間主体である銀行による「基本ルール」順守に関する信頼は方法的信頼であるが、銀行と企業との間の信用関係は基本的に相対取引によって形成されるため、第三者が順守いかんを確証することは困難である。「基本ルール」順守が信頼されるのは、不順守の確証が得られない場合であると言ってよい。信用関係は市場過程の結果(投資計画や販売の成否)の先取りに基づいていることにより、方法的信頼は自動的に確立するとは言えない。不順守のケースには、順守を確保するための中央銀行による介入(最後の貸し手介入等)が求められる。こうした中央銀行の行動への信頼がヒエラルキー的信頼である。中央銀行の介入は「貨幣の権力」の行使であるから、ここにおいて権威の補完が求められる。中央銀行の介入が特定の私利を利するものであれば、それは不正な介入と見なされる。

17) 第一に、信用アクセス能力は過去の返済利益に左右される。第二に、現実の経済においては、企業集団における中核的な銀行は、企業集団内の企業に対

中央銀行が分配関係に関する中立性という上位価値を尊重するであろうことへの信頼が、倫理的信頼である。

以上のように、資本主義的市場システムの「安定性」ないし「秩序」のための条件として、「貨幣の権力」に対する権威(上位価値)の補完を考えることができる。いずれの上位価値も個人主義的価値(「個人の開花」や「個人的自由」)に帰せられるものである。権威(上位価値)を考慮することによって、市場システムに関する有意義な実証的分析が可能となると思われる。

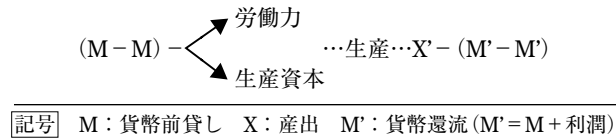
(3) 市場ヒエラルキーと価値ヒエラルキー

最後に、テレがマルクスの資本循環の図式を利用して提示している、市場秩序(ないし商業的秩序)の価値ヒエラルキーをめぐる議論を取り上げたい。しかしその前に、比較のために、貨幣経済アプローチによる市場ヒエラルキー(市場階層)論——具体的にはハイネ/ヘルの市場ヒエラルキー論(Heine/Herr [2003])——を見ておくことにする。パラダイム解明的な志向を持つドイツの経済理論研究をバックボーンとするハイネとヘルは、経済学のパラダイムを大きく、新古典派(交換経済アプローチ)、古典派(資本主義経済アプローチ)、ケインズ派(貨幣経済アプローチ)の3つに区別した上で、このうち特に貨幣経済アプローチを重視する立場をとる。彼らによれば、貨幣経済アプローチの重要な特色の1つは、市場間のヒエラルキーを重視することにある。

彼らのアイデアは、マルクスが用いた貨幣資本循環の一般的定式を用いて提示される。彼らは信用関係を考慮に入れて図7のような図式を提示する(同前S. 330)。ここでは企業家は自己資金を持たないものとし、もっぱら債権者から借りた貨幣を生産過程に前貸しするものとさ

して優先的に信用を供与する。このため、企業集団に属さない新興企業は、銀行信用へのアクセスが困難であることが普通である。

図7：信用関係を考慮した貨幣資本循環の一般的定式



れている。貨幣前貸しと貨幣還流のいずれもが二重であるのは、債権者と企業家それぞれの手元における前貸しと還流を表しているためである。

図7の図式に関係する資産市場・財市場・労働市場の位置から、市場間のヒエラルキーが確認されていく。まず資産市場における貨幣前貸しの決定は全過程の出発点である。生産過程への貨幣前貸しは生産の前提であるだけでなく、所得形成過程の開始でもある。こうして「貨幣の権力」の行使が資本の循環を起動させる。前貸しされた貨幣によって、財市場における生産資本（生産手段）への支出（需要）と、労働市場における賃金支払いが行われるのである。これに基づき、生産が行われ、財市場での供給がなされ、貨幣還流がなされる。こうして、資産市場を頂点とし、財市場と労働市場がその下にくる市場間のヒエラルキー（市場ヒエラルキー）が見いだされる（坂口 [2008] p. 26-28も参照）。これは権力ヒエラルキーである。

このような市場間の相互作用を考慮して市場システムを分析しようというのが、貨幣経済アプローチである。ハイネ／ヘルは、これを交換経済アプローチと代替的な1つのパラダイムで

あるとする。市場間にヒエラルキーが存在するという主張は、一般均衡公準（市場システムの安定性条件を全市場の需給均等に求める）への批判を含意している。例えば、貨幣経済アプローチによれば、資産市場で決定される投資需要が不十分であれば、完全雇用は成り立たない（不完全雇用均衡）。周知のように、これは経済理論史上におけるケインズ革命の中心的命題にほかならない。

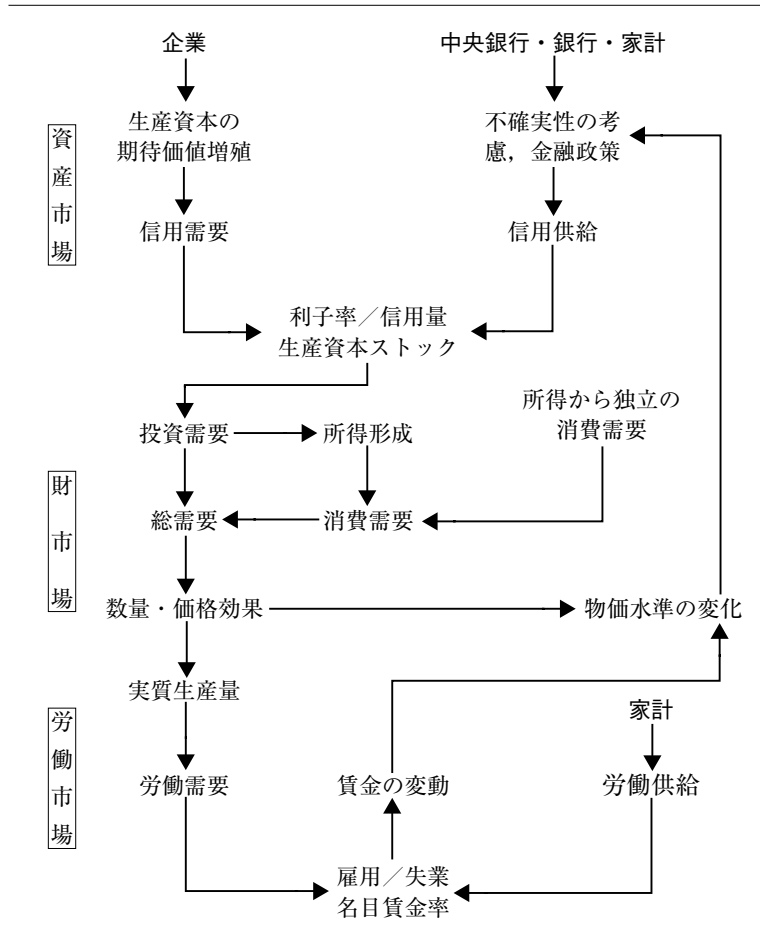
テレの議論は、以上のような議論には飽き足らず（もちろんテレがハイネ／ヘルの議論を考慮しているわけではないが）、市場のヒエラルキーを補完する価値のヒエラルキーにまで考察を進めようとするものである。テレは、ユーロ導入の直前に行われた共同研究（その成果が『貨幣主権論』（Aglietta/Orléan [1998]）において、メラネシアの1社会（アレアレ ['aré' aré] 社会）の葬送儀礼に見られる貨幣循環¹⁸⁾に関するドゥ・コペーの研究（de Coppet [1998]）に触発され、「アレアレの人々に見られる社会-宇宙的諸関係の三元的構造化から資本主義的諸関係の三元的構造化にアプローチ」（Théret [1998]）することを試みている。

テレの議論もマルクスの資本循環の図式を用

18) アレアレの人々の社会-宇宙的諸関係について解説しておこう。アレアレの人々の社会関係は死者の循環をも含む「社会-宇宙的」な広がりを持つものであり、「生の世界」を価値ヒエラルキーに従って秩序づけようとするものである。人間は唯一「表象の諸関係」に到達でき、価値ヒエラルキーの最上位に位置する。人間は生まれたときには「表象の諸関係」をまだ持っておらず、一生をかけて儀礼に参加することによって「表象の諸関係」を獲得する。死んだ後の葬儀において人間の持つ「表象の諸関係」の大

きさは、献供されるビーズ貨幣の長さによって表象される。その次が動物の属する「霊気の諸関係」、最下位には植物の属する「外形の諸関係」である。人間は死ぬと動物の水準に落ち、タブーの侵犯による死や自殺の場合には植物の水準に落ちるとされ、アレアレの人々はこれを最上位に復帰させる儀礼=祭宴を行っていく。儀礼が活発であれば社会は活性化されるが、儀礼を怠ると人間が持つ諸関係は貧弱なものとなり、社会は墮落し衰微することになる（以上坂口 [2011] p. 5-7 参照）。

図8：階層をなす諸市場間の相互作用



(出所：Heine/Herr[2003]S. 332, 図4.2.1の一部を修正)

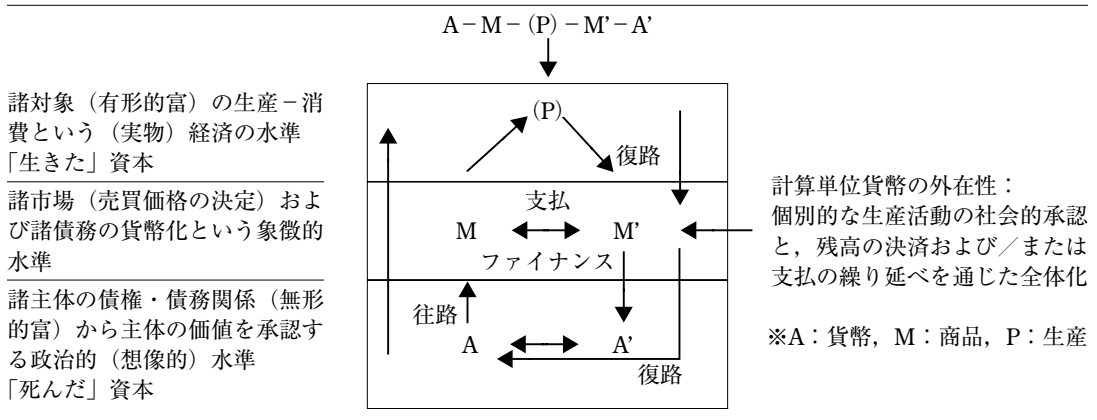
いて展開される。テレは、アレアレ社会の価値ヒエラルキーになぞらえることにより、図9のように価値ヒエラルキーを描き出す。しかしアレアレ社会と比較して異なる特徴が見いだされる。

第1に、生産的な実物資本が価値ヒエラルキーの上位形態であるが、これは「生産資本が資本の最も完全な形態であり、諸関係を最も豊かに持つ資本」(同前 p. 406) だからである。アレアレ社会における上位形態は人間であり、特に一生を終えた人間(死者)が諸関係を最も豊かに持つとされ、儀礼によって更新されていく

先祖のパワーが社会に保護をもたらすとされる。これと比較してみると、資本循環の上位形態は、アレアレ社会の動物のレベル(「霊気の諸関係」)にとどまる。その結果、「保護」という社会に不可欠な要素は見いだされない。

第2に、貨幣の位置については、アレアレ社会においては貨幣が上位の存在を表象する機能を持つものに対して、資本循環においては上位の存在を媒介するにとどまっている。テレは、資本循環の最下位(A, A')を想像界, 中位(M, M')を象徴界, 最上位(P)を現実界とも呼ぶが(同前 p. 405-406), そのことからわかる

図9：生産的資本の機能変態の循環における貨幣



(出所：Théret[1998]邦訳 p. 403)

ように、最上位の生産資本は貨幣によっては表象されないものとしている（定義的に、象徴を超えるものが現実界である）。

テレの議論は近代社会における貨幣の位置を規定するために比較研究をしようというものが、われわれはこれを、市場ヒエラルキーを補完する価値ヒエラルキーを探り当てようとする議論としても読むことができよう。テレは貨幣が上位の形態ではないことを指摘した後、次のように言っている。「おそらくこうした理由から、貨幣は、経済秩序を生産経済に還元する経済学者たちによって排除されるのだろう」（同前 p. 407）。

本報告の文脈の中にテレの議論を位置づけよう。図9の中位（M，M'）には貨幣的交換があり、そこではキアスムの意味での水平的関係が見いだされる。資本循環は、これを内に含む形（ルーマンの言う「内部環境」）で垂直方向の運動としてある。資産市場を上位に位置づけるハイネとヘルの市場ヒエラルキーは、「貨幣の権力」の一連の行使によって成り立つ権力ヒエラルキーである。これに対して図9においては、資産市場は最下位に来ており、権力ヒエラ

ルキーと逆方向の価値ヒエラルキーが描かれている。最上位の生産資本は私的な領域において遂行され、これが上位価値であるとする見方は、他人の干渉なしに対象（物）と向き合う個人に価値を置く近代の個人主義的イデオロギーと整合的である。よってテレの議論は、「市場システムの安定性」ないし「市場秩序」の条件が価値ヒエラルキーによる補完であることを明らかにするものである。これを無批判的な体制擁護論と見なすことはできない。逆である。テレはアレアレ社会の社会－宇宙的循環との比較により、資本循環は（先祖や神による）社会の保護¹⁹⁾をもたらさないことを明確にした。分権的市場システムがそれだけで社会を形成するという見方は否定されているのである。テレは以上のような議論の後、図9の中位（M，M'）に関わる課税－財政循環も考慮に入れ、近代社会が経済（市場）と政治（国家）の同盟によって成り立ち、そこに独特な調整の問題（法や貨幣という媒介を通じた調整）があることを分析していく（中原 [2010] p. 94-99参照）が、これは資本循環の秩序条件を論じるには全体社会の文脈が要求されることを意味しているだろう。

19) 『貨幣主権論』(Aglietta/Orléan [1998]) の「生の債務」仮説（坂口 [2011] p. 7-9 参照）は、このよ

うな要素は非近代・非西欧社会のみでなく近代・西欧社会においても不可欠であるとする。

まとめ

まとめておこう。1.においては、全体論的アプローチの要件を、①全体論的事実への着目、②市場システムの安定性条件の定式化に求め、レギュレーション理論やコンヴァンション理論がこの方向をとっていることを指摘した。2.では、交換のキアスムを直接交換と貨幣的交換の両者について定式化した。直接交換のキアスムは交換構造 (TS) として、貨幣的交換のキアスムは流通構造 (ZS) として定式化された。(TS) や (ZS) は、 $W-W$ や $W-G$ という定式では明らかにされない、要素レベルでの相互媒介の構造を明示している。マルクスの商品分析を踏まえて初めて明らかにされる、このような相互媒介の構造を重視することは、オルレアンが提唱する「関係の経済学」²⁰⁾に通じるものとする。2.ではさらに、(TS) や (ZS) を構成する全体論的諸契機——商品の使用価値、交換比率、貨幣——の生成や安定性条件を解明する議論としてコンヴァンション理論を位置づけた。また市場システムの垂直性の契機について、①全体論的契機それ自体、②個人間で行使される「貨幣の権力」、③「貨幣の権力」の非対称性の固定化、の3つを区別した。3.では、③が問題になる文脈である資本主義的生産関係に視野を広げ、市場システムの安定性条件として価値ヒエラルキーによる補完があることを指摘した。「貨幣の権力」の行使が安定的に遂行されるには上位価値 (権威) の確立が必要であり、この点を重視した議論としてレギュレーション理論 (フォーディズム分析、貨幣信頼論) を特色づけた。最後に、資本循環に関するテレの議論を取り上げ、ケインズ派の貨幣経済アプローチが市場の権力ヒエラルキーの指摘にとどまったのに対して、

20) オルレアンは経済学の伝統である「量 (grandeur) の経済学」への対案として、「関係 (relation) の経済学」を構築しようとする。「量の経済学」を分析した結果、オルレアンは「少々逆説的な結論に到達した」

テレが価値ヒエラルキーによる権力ヒエラルキーの補完に着目する観点から経済分析のさらに広い枠組みへの道を開いていることを明らかにした。

参考文献

- Aglietta, Michel / Cartelier, Jean [1998] «Ordre monétaire des économies de marché» (坂口明義訳「市場経済の貨幣的秩序」) in Aglietta/Orléan [1998], Chap. 4.
- Aglietta, Michel / Orléan, André (éd.) [1998] *La monnaie souveraine*, Odile Jacob. (坂口明義監訳『貨幣主権論』藤原書店, 2012年)
- Boyer, Robert [1986] *La théorie de la régulation : une analyse critique*, Collection «Agalma», La Découverte. (山田鋭夫訳『レギュレーション理論——危機に挑む経済学』藤原書店, 1990年)
- Clerc, Denis/Lipietz, Alain/Satre-Buisson, Joël [1985] *La crise*. 4^e édition entièrement remise à jour, éd. Syros. Coll. Alternatives économiques. (坂口明義・清水和巳訳『現代の経済危機——レギュレーション理論による総括』新評論, 1991年)
- De Coppet, Daniel [1998] «Une monnaie pour une communauté mélanésienne comparée à la nôtre pour l'individu des sociétés européennes» (坂口明義訳「メラネシア共同体にとっての貨幣と、ヨーロッパ社会の個人にとっての現代貨幣とを比較する」) in Aglietta/Orléan [1998], Chap. 5.
- Dumont, Louis [1980] *Homo Hierarchicus——the Caste System and its Implications*, Translated by Mark Saintsbury, Louis Dumont and Basia Cuatli. Complete revised English edition, The University of Chicago Press. (田中雅一・渡辺公三訳『ホモ・ヒエラルキクス——カースト体系とその意味』みすず書房, 2001年)
- Dumont, Louis [1983] *Essais sur l'individualisme——une perspective anthropologique sur l'idéologie modern*, Éditions du Seuil. (渡辺公三・浅野房訳『個人主義論考——近代イデオロギーについての人類学的展

と言う。それは「経済学のアプローチは、固有の意味での交換にはほとんどスペースを割くことがない、という結論である」(Orléan [2011] p. 52)。

- 望』言叢社, 1993年)
- 海老塚明 [1984] 「貨幣と経済学批判——ベネティ, カルトリエによる経済学批判のプロブレマティーク」, 『一橋論叢』第91巻第5号。
- Göhler, Gerhard [1980] *Die Reduktion der Dialektik durch Marx. Strukturveränderungen der dialektischen Entwicklung in der Kritik der politischen Ökonomie.* Klett-Cotta.
- Heine, Michael/ Herr, Hansjörg [2003] *Volkswirtschaftslehre. Paradigmenorientierte Einführung in die Micro- und Macroökonomie.* 3., völlig überarbeitete und erweiterte Auflage. R. Oldenbourg Verlag.
- Herr, Hansjörg [1992] *Geld, Währungswettbewerb und Währungssysteme. Theoretische und historische Analyse der internationalen Geldwirtschaft,* Campus Verlag. (坂口明義訳『国際通貨の政治経済学——貨幣・通貨間競争・通貨システム』多賀出版, 1996年)
- Hoff, Jan/Petrioli Alexis/Stütze/Wolf, Frieder Otto (Hrsg.) [2006] *Das Kapital neu lesen—Beiträge zur radikalen Philosophie,* Westfälisches Dampfboot.
- 岩井克人 [1997] 『資本主義を語る』ちくま学芸文庫。
- 岩井克人 [1998] 『貨幣論』ちくま学芸文庫。
- Luhmann, Niklas [1988] *Die Wirtschaft der Gesellschaft,* Suhrkamp Verlag. (春日淳一訳『社会の経済』文真堂, 1991年)
- Malamoud, Charles [1998] «Le paiement des actes rituels dans l'Inde védique» (坂口明義訳「ヴェーダ・インドにおける祭式的行為への支払い」) in Aglietta/Orléan [1998], Chap.1.
- Marx, Karl [1953] *Zur Kritik der Politischen Ökonomie.* MEW, Bd.13. Dietz Verlag. (杉本俊朗訳『経済学批判』大月書店, 国民文庫, 1966年)
- Marx, Karl [1962] *Das Kapital. Kritik der Politischen Ökonomie.* Bd.1. Buch1. MEW, Bd.23. Dietz Verlag. (岡崎次郎訳『資本論(1)』大月書店, 国民文庫, 1972年)
- メルロ=ポンティ, モーリス [1999] 『メルロ=ポンティ・コレクション』中山元編訳, ちくま学芸文庫。
- 中原隆幸 [2010] 『対立と調整の政治経済学——社会的なるもののレギュレーション』ナカニシヤ出版。
- 中山元 [1999] 「メルロ=ポンティの〈身体〉の思想」, メルロ=ポンティ [1999] 所収。
- 中沢新一 [2011] 『日本の大転換』集英社新書。
- 中沢新一 [2012] 『野生の科学』講談社。
- Orléan, André [2011] *L'empire de la valeur: refonder l'économie,* Éditions du Seuil. (坂口明義訳『価値の帝国——経済学を再生する』藤原書店, 2013年)
- Reichelt, Helmut [1985] «Sur la réception du Capital de Marx en République fédérale allemande», in Georges Labica (dir.), *1883–1983, L'œuvre de Marx, un siècle après,* PUF.
- 坂口明義 [1989] 「マルクス貨幣生成論における叙述変更とその方法的含意について——G・ゲーラーの所説の紹介」, 高須賀義博編『シンポジウム『資本論』成立史〔佐藤金三郎氏を囲んで〕』新評論, 所収。
- 坂口明義 [2001] 『現代貨幣論の構造』多賀出版。
- 坂口明義 [2006] 「貨幣の両義性・主権性と銀行の特殊性」『環』2006年秋号 (第27号)。
- 坂口明義 [2008] 『貨幣経済学の基礎』ナカニシヤ出版。
- 坂口明義 [2011] 「貨幣と社会の関係および近代貨幣の特殊性について——M. アグリエッタ・A. オルレアン編著『主権貨幣』を手がかりとして——」『専修経済学論集』第108号。
- 佐藤金三郎 [1982] 「商品の物神崇拜——河上肇の所説によせて——」, 真実一男・尾上久雄・柴山幸治編著『国家と市場機構』ミネルヴァ書房, 所収。
- Théret, Bruno [1998] «La dualité des dettes et de la monnaie dans les sociétés salariales» (中原隆幸訳「勤労者社会における債務と貨幣の二元性について」) in Aglietta/Orléan [1998], Chap. 7.
- 山本哲士 [1992] 「プラチックとプラクシスの差異——客観化することの客観化：一つの構造主義批判——」, 山本哲士・柳和樹・滝本往人『プラチック理論への招待——暗黙の思考領域をどうとらえるか——』三交社, 所収。
- 吉沢英成 [1994] 『貨幣と象徴——経済社会の原型を求めて』ちくま学芸文庫。